

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 26 年 3 月 4 日現在

機関番号：31311

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520683

研究課題名（和文） 近世木版絵図史料の使用痕分析に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A basic research concerning the analysis of the user's traces on the early modern wood block print historical records.

研究代表者

千葉 正樹（CHIBA MASAKI）

尚絅学院大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：30312630

研究成果の概要（和文）：近世木版絵図は利用者と社会の要求に応じて、容易にその表現を変化させるという特徴があった。江戸絵図は図としての正確性と情報量が反比例する関係にあり、江戸城がその調整の空間として用いられていることがわかった。また、利用者は絵図上にその行動の痕跡を残している場合が少なくない。幕末期の江戸絵図の一部を、当時と近似した技術と素材で復元することに成功し、書き込み・折目などの現れ方を実験する研究を続行している。

研究成果の概要（英文）：It is characteristic of the early modern wood block prints that they easily changed their expressions in response to the demands of their users and the society. In Edo map pictures, we can see unique inverse proportions. When the pictures become more and more accurate as diagrams, they tend to have less and inferior information. It turned out that the area of the Edo castle was used to adjust the consequent incoherence. On the other hand, the users often left traces of their acts on prints. I succeeded in restoring a part of Edo map pictures in the last days of the Tokugawa Shogunate by using similar skills and materials in those days. Now I carry on with my experiment of recreating notes and creases on the Pictures and pursue my research on the users' traces.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史、近世史、絵図、江戸

1. 研究開始当初の背景

日本近世史において、木版絵図の利用に関心が高まっていたが、文字史料分析の補助史料としての利用にとどまる場合が多く、絵図本体を画像として分析するという手法は未成熟であった。また、絵図の作成目的や作成者

に関する情報については一定の蓄積があったものの、一方、利用者側の利用方法や保存方法についてはほとんど研究が進んでいなかった。

2. 研究の目的

(1) 近世木版絵図の分析に関する基礎的方法を開発する。とくに画像本体をいわば画像側の論理に立って把握するために、製作過程に加えて、書き込み等の利用痕を分析可能とするデータを蓄積する。

(2) 江戸における木版絵図等の都市画像史料の量的・横断的分析によって、都市社会における絵図全体としての利用実態を把握する。

(3) 幕末期に土佐藩士が利用したことが明らかになって江戸絵図と関連史料の分析を通じて、絵図利用の個別の実態を明らかにするとともに、利用者の社会的、文化的状況を把握する。

3. 研究の方法

(1) 幕末期江戸木版絵図『分間懐宝御江戸絵図』の一部を、現代の伝統的工芸技術継承者の協力を得て復元し、その技術的特徴を把握する。その後、復元絵図を用いて、書き込み・折り返し等の様々な状況を想定した使用痕に関する実験を行い、利用者の利用実態を解明するための基礎的データを得る。

(2) 上記の原図を江戸において利用したことが明らかになっている土佐藩士・藤井正直の江戸における行動実態を解明し、絵図使用痕との関連を突き止める。そのため、幕末期土佐藩の関連史料、先行研究について高知市を中心に調査する。

(3) 19世紀にいたる江戸の木版絵図を中心とする出来る限り多数の都市画像史料について総合的・網羅的な把握を行う。それらについて横断的な分析を行い、表現における歴史的な変化の過程と社会情勢との関係など、都市全体の情報構造における位置づけに留意して概略を把握する。

(4) 東北地方を中心に、各地で所蔵されている近世都市画像史料を探索し、今後の研究の架橋とするとともに、とくに保管・保存の実態を把握する。

4. 研究成果

(1) 江戸絵図の復元および使用実験

『分間懐宝御江戸絵図』の一部(15センチ平方)を、現在活動している浮世絵彫り師である渡辺一夫氏、および刷り師である吉岡秀男氏に協力を得て、出来る限り当時のものに近い素材と技術を用いて復元した。その結果得られた幕末期江戸絵図の製作方法・過程・技術的特徴に関する概略は以下のようになる。

①製作方法と過程は浮世絵と基本的に同一である。

②ただし、屋敷と屋敷を区画する墨線など

は髪の毛よりも細いものがあり、現在の技術では復元出来なかった。そのため、一部に写真製版を用いざるを得なかった。

③原史料の紙質はコウゾを主とする。しかしすべてではなく、混入物があると思われるが解明出来なかった。何かを混ぜることで使いやすい紙としていたと思われる。今回は最も感触の近い機械和紙「版画用生濾周桑ドーサ引」を用いた。

④色板は4種を用いており、黄・青・緑・赤の順に重ねたことが明らかである。版木は桜を用いた。

復元した絵図は100枚である。それらについて、原史料の使用実態の観察に基づいて、当時のものと組成の近い墨・朱墨を用い、書き込みを繰り返し行う予定であった。ポイントは木版による墨線と書き込まれた線との重なりがどのように現れるのか(にじみ・かすれ等)、書き込み線の先後の関係、書き込まれた線の方向などである。それによって、絵図一面に現れている書き込み線が全体としてどのような順番で描き込まれ、どの地点からどの地点に向かっていくのかといった、使用者の行動に即した筆の跡を分析可能になるはずである。

しかしながら、発病に伴って研究のこの部分は中断せざるを得なかった。

(2) 土佐藩士・藤井正直に関する研究

原史料である絵図2点の書き込みから、所蔵者であった藤井正直は、第一の絵図において1852年(嘉永5)7月25日に江戸に出府、翌年7月20日に家郷に帰着し、その間の江戸市中の訪問先を朱筆で図に記したものらしい。第2の絵図では、1856年(安政3)11月9日に江戸に到着し、同11日に絵図を購入、26日に「築地御屋敷」の通用門の少し北にある「猪長屋」で、今度は墨でもって行動した道筋をたどった、と記している。

すなわち藤井の江戸滞在時期はそれほど長いものではなく、とくに2度目の滞在と江戸における行動期間は(絵図上に記された分に限定して)約半月であった。しかし絵図に記されたその訪問先はほぼ江戸全域に及び、とくに公武合体派と目される大名・旗本の屋敷の多くに印が付されている点が着目される。つまり短期間で、何らかの理由を持って、当時土佐藩の政治的立場を背景とする行動を江戸で行っていたという可能性が見える。

高知市で行った調査の結果、藤井正直について次のような点が明らかになった。

①「御侍中先祖書系図牒」に「藤井猪三郎清衡家」の第4代として「藤井猪三郎正直」がいたことが記されている。すなわち藤井は上士階層に所属する藩士であった。

②「戊辰従軍戦士名簿」の負傷者に藤井正明がいて、正直の後継者であろうと推定され

る。この時点において正直は隠居あるいは死去していたらしい。

③前2史料の書き込みから、藤井正直は藩において使者的な役割を与えられ、土佐と江戸とを往復したらしいことがわかった。それと関連する史料群として、山内家宝物資料館に「嘉永五子年七月二十日引合御伝書箱」があることを確認したが、未見である。

④土佐藩邸の指図類が高知市内に伝存しているものの史料状況はあまりよくなく、公開されていない。

⑤藤井家の史料は発見されていない。

このような史料状況から、今後の調査の継続によって藤井正直の藩政上の立場、仕事内容などが浮かび上がらせることが可能であると期待出来る。一方、藤井正直の趣味・志向など、人となりについては、日記等の直接手がかりとなる史料が今後発見されない限り、把握は困難であろう。それだけに2枚の江戸絵図に記された藤井の行動痕跡は貴重である。

(3) 江戸木版絵図に関する研究

以前の研究において、江戸木版絵図の周縁部に当たる小石川村周辺については分析を行っていた。今回は中心をなす江戸城に焦点を集め、分析を継続した。その結果、近世に刊行された江戸絵図は以下、六つの群に分けて把握可能であることがわかった。

- A・寛永～明暦期の絵図群
- B・遠近道印製作の絵図群（寛文～正徳期）
- C・石川流宣製作の絵図群（元禄～宝暦期）
- D・元禄～天明期の道印系絵図群
- E・金丸影直製作の絵図群（明和～安政期）
- F・高井蘭山製作の絵図群（天保～幕末）

これらは現在の地図とは大きく違い、製作者および版元の意向によって、容易に傾向を変化させている。そのなかで周縁部である小石川村周辺と江戸城とでは、描写内容と紙面上の面積において、いわば反比例するような状況が見られた。

すなわち、上記A、Cの絵図群では江戸城を絵画的に描写しており、使っている面積も大きい。一方、小石川村周辺は簡略な道路等の描写にとどまり、実際の面積からして、用紙上の面積は縮小して描かれている。B、Fの絵図群は測量に基づいたと思われ、面積関係は正確になっている。興味深いのはD～Eの絵図群で、小石川地区において町名や寺社名、屋敷名などの地域情報量を増加させるのに応じて、地区が用紙上に占める面積が増大する。一方で江戸城は紋所一つを描くだけとなり、面積比率を減少させていく。

このようなことから、江戸絵図は利用者の要求をそのまま描写に反映させる構造になっていたと考えられる。すなわち初期、利用者が江戸城に高い関心を持ち、場合によって

は場内に入出入りする武士が主体であった場合は江戸城の詳細な描写が行われ、一方で場末である小石川は簡略化される。その後、小石川などの周縁部において絵図を利用する頻度が高まり、そちらの描写に重点を移すと同時に、江戸城はいわば空虚な背景の位置に押しやられたのである。

(4) 近世絵図史料の搜索と保管状況の把握主として以下三カ所で行った。

①仙台市旧中田村地域

②秋田県南部地域

③福島県相馬市

それぞれ複数の調査地点があり、また震災による調査中断もあったため詳細は省くが、次のような点が今後の課題として明らかになってきた。

旧家において絵図史料の発見例は少ないが、場合によっては目録上に記載されないなど、どちらかという等閑視される傾向が大きかったといえる。そのため旅日記などの関連史料との関係を突き詰めることが難しくなっている。今回、ほぼ手つかずで発見出来た絵図史料の場合、旅日記や関連する書簡と同一のくくりに入っている場合があり、利用者の関心と現地での取り扱いが浮かび上がってきた。

また、地方で見いだされる手描きの絵図はかなり多い。絵図が木版印刷されるような地域は江戸・京都などに限定されており、多くの地域では自らの利用目的に沿って、自ら筆を執ることが当たり前に行われていたのである。つまり製作者と利用者が一体化している場合であって、江戸絵図はその分離が進んだ形態として大きくは位置づけられよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 千葉正樹 画像のなかの江戸城—版本江戸絵図を中心に 東京大学史料編纂所紀要 22巻 査読無し 2012 267-280

〔学会発表〕(計1件)

- ① 千葉正樹 画像のなかの江戸城—版本江戸絵図を中心に 東京大学史料編纂所シンポジウム 平成22年9月11日 東京大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千葉 正樹 (CHIBA MASAKI)
尚絅学院大学・総合人間科学部・教授
研究者番号：30312630

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：

